

樽見の大桜

この春、小学校を卒業していくぼくたちは、二メートルほどにのびた桜のなえ木をその大桜の周りに植樹することになりました。この大桜は、ぼくたちの町のシンボルなのです。

大桜の世話をしているぼくのおじいさんたちに手伝ってもらいながら、六年生全員で記念の若木を植えました。

あれは一年前、ぼくが六年生になった四月でした。

毎年四月、満開の「樽見の大桜」をおじいさんといっしょに見に行くのをぼくは楽しみにしています。

「樽見の大桜」は、ぼくの家の近くにあります。仙人の国にあるような気品に満ちた大桜ということで江戸時代には「仙桜」とも命名されたそうで、一九五一（昭和二十六）年に国の天然記念物に指定されました。

「そろそろ行こうか。もうだいぶさいと思うで。」

やわらかな日差しが暖かいある日、おじいさんとぼくは、樽見の大桜へと続く山道を登りました。

さきほこる桜を見ようと、たくさんの人が登って行きます。毎年、一万人の人がこの大桜を見に来るのです。

息をはずませながら歩いていくと、ぱっと視界が広がり、満開の大桜が姿を現しました。おじいさんとぼくは、毎年のことですが、その美しさに息をのみ、しばらくたたずんでいました。

「じいちゃん、あの大桜は千年も前からあるんでしょう。毎年、よくこんなに花をさかせるなあ。

自然の力ってすごいな。」

そう言うぼくに、おじいさんは、

「そうだな、自然の力は、確かにすごいなあ。でもなあ、あの桜は、実はたくさんの人に支えられて、ああしてきれいな花をさかせとるんだで。」

と言いました。

「えっ、どういうこと。」

樽見の大桜に向かってゆっくり歩きながら、おじいさんは、話してくれました。

「わしが子供のころは、実はこんなにたくさん花はさいとれへんだったで。それどころか、だんだんとさく花は少なくなっただ。お前が生まれたころは、この木はもうかれていくんではないかといわれるくらい、花の数は少なくなっただったんだで。」

初めて聞く話に、ぼくはおどろきました。

千年の間、ずっとこんなに見事な花をさかせ続けていたとばかり思っていたのです。

「この桜は町の自まんや。みんなほこりに思っとる。だからな、何とか木に元氣を取りもどすことはできないかと考えたんや。しかし、どうすればいいかわからへん。ほんで役場に相談した

ら、樹木医の先生をしようかいしてくれたんだで。」

「樹木医？」

「木のお医者さんだな。その先生に、大桜をしん断してもらったんだで。そしたら、とても重し
ようだと言われた。人間でいうと重病人やな。幹の中が空どうになつとつて、木の重さで幹が
さけとるといしん断やった。」

二人は、大桜の下までやってきました。幹の太さは直径六メートル程もあります。

確かに、よく見ると幹の中が空どうになっているのがわかります。

「そのままにしておくと、台風や大雪で枝が折れてしまう。そして、幹もさけてしまう。そこで、
支柱をつくって支えたんや。そうすれば、枝や幹の重さが分散されるやろ。」

木の周りにジャングルジムのようなものがあるのは前から知っていましたが、これが枝や幹を
支えているとは思いませんでした。

「支えはしたが、幹がかれかけとつたもんで、木が水を吸い上げることができれへんのだ。これ
では桜は生きていけれへん。樹木医の先生は、ずいぶん考えた。で、どうしたと思う？」

おじいさんはぼくに質問しました。でも、想像がつきません。

「ううん、難しいな。」

「そうやろ。わしたちも、ずいぶんと考えたんだけど、わからへん。すると、先生が、『不定根
を育てましょう』と提案されたんだで。」

「不定根？」

おじいさんはうなずいて、幹から出ている細い枝のようなものを指しました。

「これを不定根といってな、ここから水や養分を吸い上げるように工夫したんだで。」

長さは五メートルほどでしょうか、幹から何本も地面に下りるようにのびています。

「先生といっしょにこの根を育て始めたんだけどな、根は少しずつしかのびれへん。地面に根付
くまではとても時間がかかる。夏にはかれないように、冬には雪で傷つかないように、一年を
通してみんなで守りながら大事に育てたんだで。と中でかれてしまった根もあって、みんな、
もうあかんと思った。そんな時、先生から『ふつうの桜では、とつくにかれてしまっているは
ずなのに、この大桜は、もう千年も花をさかせ続けています。それは、この桜の木がもってい
る力と、この桜を愛していた人たちが、それぞれの時代で世話をし続けてきたからです。今度
は、私たちが、その思いをリレーする番です。そして、この立派な桜を、次の世代の人にも見
てもらいましょう……。』とはげまされながら、みんなで協力して不定根をこの長さにまで育
てたんだ。六年もかかったで。」

おじいさんは、静かに話してくれました。六年といえば、小学校入学から卒業までです。

「ほら、足元を見てみんせえ。」

おじいさんが指さす方を見ると、自分がさん橋の上に立っていることに気づきました。

「このさん橋の下の土の下には、とても細い根がたくさん走っているんだで。毎年一万人もの人
が来てふんでいくと、土が固くなって根が水を通しにくくなり、死んでしまうんだで。」

おじいさんから話を聞く前は、ジャングルジムも、不定根も、さん橋も、あまり気になりませ
んでしたが、この時は、目の前の桜が、今までとはまったくちがうもののように見えました。

それから一年、植樹を終えたぼくたち六年生は、今植えた若い桜と、つぼみをたくさんもった大桜を、いつまでも見ていました。

ぼくは、一年前のあの日のおじいさんの話を思い出していました。

「木がもっている自然の力と、それを守ろうという人々の思い……。」

大桜のたくさんのつぼみも、ぼくたちをじっと見ているように感じました。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。